

茨城県教育財団文化財調査報告第232集

# 内海道遺跡

一般県道高崎岩井線現道拡幅事業地内  
埋藏文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県石下土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第232集

# 内海道遺跡

一般県道高崎岩井線現道拡幅事業地内  
埋藏文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県石下土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

このたび、茨城県石下土木事務所は八千代町大字坪井において、一般県道高崎岩井線現道拡幅事業を計画いたしました。その予定地内には内海道遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県石下土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年5月に発掘調査を実施しました。

本書は、内海道遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県石下土木事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、八千代町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、茨城県石下木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した、茨城県結城郡八千代町大字坪井字内海道58番地の3に所在する内海道遺跡の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　査　　平成15年5月1日～平成15年5月31日

整　理　　平成15年7月1日～平成15年7月31日

3 当遺跡の発掘調査は、調査課長川井正一のもと、調査課第1班長秋野谷悟、調査員早川麗司が担当した。

4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、調査員早川麗司が担当した。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=+23080m、Y軸=+7320mの交点を基準点（Alal）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠し「Alal区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯および東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK

遺物 土器-P 土製品-DP 石-Q

土層 捩乱-K

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

黒色処理・炭化物 ■■■ 被熱痕・火床面 ■■■ 煤・調査区 ■■■  
土器 ● 土製品 ○ 石 □ 硬化面 ————

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は50分の1、遺構は60分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。

7 「主軸方向」は、住居跡については竈の中心と入り口を結んだ軸線とした。その他については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、主軸・長径が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

8 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の単位はcm及びgで示した。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 備考欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は、土器・拓本のみ掲載の土器片、土製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

9 遺構一覧表における計測値は、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

## 抄 錄

ふりがな	うちかいどういせき							
書名	内海道遺跡							
副書名	一般県道高崎岩井線現道抜幅事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第232集							
著者名	早川 駿司							
編集機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	標高	調査期間	調査面積	調査原因
内海道遺跡	茨城縣結城郡八千代町大字坪井字内海道58番地の3	08521	36度 --	138度 12分 28秒 36度 12分 40秒	25m 34分 53秒 138度 34分 41秒	20030501 /	26m <sup>2</sup>	一般県道高崎岩井線現道抜幅事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
内海道遺跡	集落跡	奈良	竪穴住居跡	1軒	土師器	広範囲な遺跡の一画の調査である。		
		平安	竪穴住居跡	1軒	土師器、石(支脚)			
		時期不明	土坑	1基				

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 錄	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	9
2 その他の遺構と遺物	13
(1) 土坑	13
(2) 遺構外出土遺物	14
遺構一覧表	14
第4節まとめ	15
写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、産業・経済の活性化や県全域の発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めている。

平成14年9月4日、茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道高崎岩井線道路改良事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成14年9月20日現地踏査を、平成14年10月23日に試掘調査を実施した。平成14年11月5日茨城県教育委員会教育長から茨城県石下土木事務所長あてに、事業地内に内海道遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成15年2月3日、茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事の通知が提出された。平成15年2月20日、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、茨城県石下土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成15年2月26日、茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道高崎岩井線現道拡幅事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。その結果、平成15年3月4日、茨城県教育委員会教育長から茨城県石下土木事務所長あてに、内海道遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県教育財團は、茨城県石下土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年5月1日から5月31日まで発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

内海道遺跡の調査は、平成15年5月1日から平成15年5月31日まで実施した。調査経過については下表の通りである。

工程	月	5月
調査準備		
表土除去・遺構確認		
遺構調査		
洗浄・注記・写真整理作業		

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

内海道遺跡は、茨城県結城郡八千代町大字坪井字内海道58番地の3に所在する。

八千代町は、関東平野の中央、茨城県南西部に位置する。八千代町と下妻市の境には、流域延長176.7kmの鬼怒川が南に流れている。当地域は鬼怒川中流域に当たり、栃木県から南にのび、鬼怒川を東限とする結城台地と鬼怒川右岸の沖積地に大きく二分することができる。結城台地は八千代町付近では北西から南東にむかって標高が下がってくる。沖積地は大きく見ると下妻台地と結城台地に挟まれた「鬼怒川低地」と「飯沼川低地」に分けられ、鬼怒川両岸には自然堤防が形成されている。鬼怒川は昔から氾濫を繰り返し、その流路を変え現在に至っている。今も町域には旧河道を見ることができ、特に大字小屋、久下田、瀬戸井、新井、八町、沼森、川尻にその流路がはっきりと残されている。その両岸にはやはり自然堤防が形成されている。

当遺跡は、鬼怒川右岸の標高25mほどの自然堤防上に立地している。調査前の現況は畠地である。

### 第2節 歴史的環境

古くは「毛野河」「衣川」「綿川」とも書かれた鬼怒川は、常陸国と下総国の国境を流れていた。氾濫を繰り返し流路を変更していたことが、当地域に存在する旧河道の存在からうかがい知ることができる。当遺跡の周辺は、「続日本紀」の神護景雲年間の河川改修工事の記載と密接に関連する地域である。768(神護景雲2)年に開削が完成した新河道の位置は、八千代町大渡戸付近から下妻市樹瀬に至る間と推定されている<sup>1)</sup>。大字小屋、久下田、瀬戸井、新井、八町、沼森、川尻に明瞭に残る旧河道が改修工事以前の流路と考えられており<sup>2)</sup>、大里北遺跡<4>、小屋遺跡<5>、遠上遺跡<10>、久下田本田遺跡<11>、川村遺跡<12>、瀬戸井下遺跡<17>、瀬戸井上遺跡<18>、堂山遺跡<26>、沼畑前遺跡<27>、小次郎内遺跡<28>、宮東遺跡<29>、沼森本田遺跡<30>、川尻北遺跡<31>などの諸遺跡が周辺に所在する。また、川尻から東大山、栗野集落に抜けるところにも旧河道が確認でき、小滝後遺跡<32>、小滝前遺跡<33>などの遺跡が確認できる。また現在の鬼怒川沿いの自然堤防にも、六方寺遺跡<2>、宮西遺跡<3>、後山北遺跡<6>、後山南遺跡<7>、出羽内遺跡<8>などが確認されている。いずれの遺跡も河道が形成する自然堤防上にあり、一部古墳時代から継続すると考えられる遺跡もあるが、大半は奈良時代以降の遺跡である。河川改修は洪水の被害から集落及び耕地を守ることが目的であり、改修後の干上がった旧河道が絶好の耕地になったことが推察されている<sup>3)</sup>。この時期の遺跡の展開は、河川改修に密接に関係していたものと考えられる。奈良・平安時代の遺跡は台地上にも展開され、堅穴住居跡32軒、掘立柱建物跡3棟などが調査され、縁袖陶器、墨書き土器、鉄製品、双耳壺などが出上した一本木遺跡<sup>4)</sup>、8世紀の焼失住居跡と9世紀の「冰室」と考えられる堅穴状遺構が確認された占葉師遺跡<sup>5)</sup>、平安時代の堅穴住居跡が1軒確認された丸久保遺跡、9世紀中頃の堅穴住居跡5軒、土坑2基、製鉄炉3基など鍛冶工房跡が確認された尾崎前山遺跡<sup>6)</sup>などがある。また、藏骨器が尾崎・栗山・音谷権現山遺跡で確認されている<sup>7)</sup>。立地が異なる台地上と低地の遺跡の関連性は不明であり、今後の調査研究に負うところが大きい。

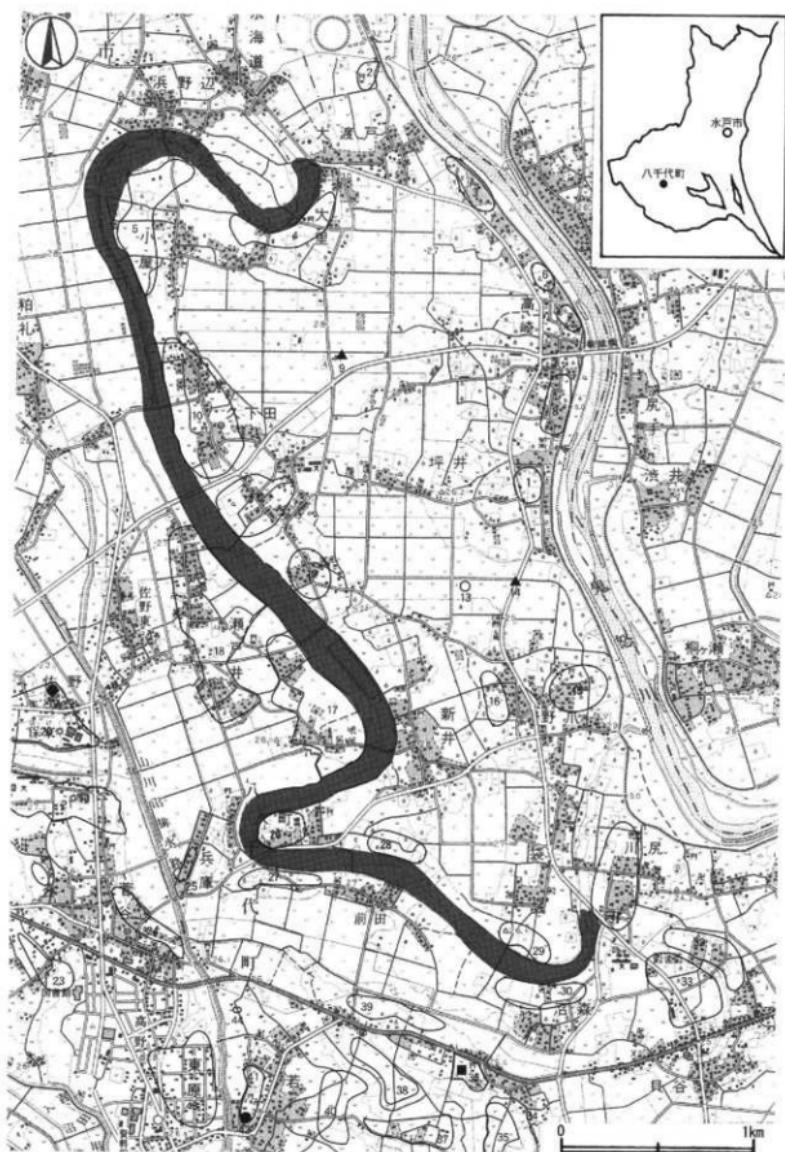
その他の時代を概観してみると、旧石器時代は、尾崎前山遺跡から瑪瑙の剥片が<sup>8)</sup>、氏神A遺跡からは薪が峰

産黒曜石の野棺・休場壇網石刃核が出土している<sup>1)</sup>。縄文時代は早期から晩期まで各時期の遺跡が確認されている。弥生時代は、尾崎前山遺跡で中期後半の住居跡・軒が調査されている<sup>2)</sup>。古墳は主体部から鏡が出土した太田古墳<sup>3)</sup>、埴輪を伴った円墳の仁江戸7号墳<sup>4)</sup>が調査されている。中世では70基をこえる板碑が確認されている<sup>5)</sup>。

\* 文中の（ ）内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

社)

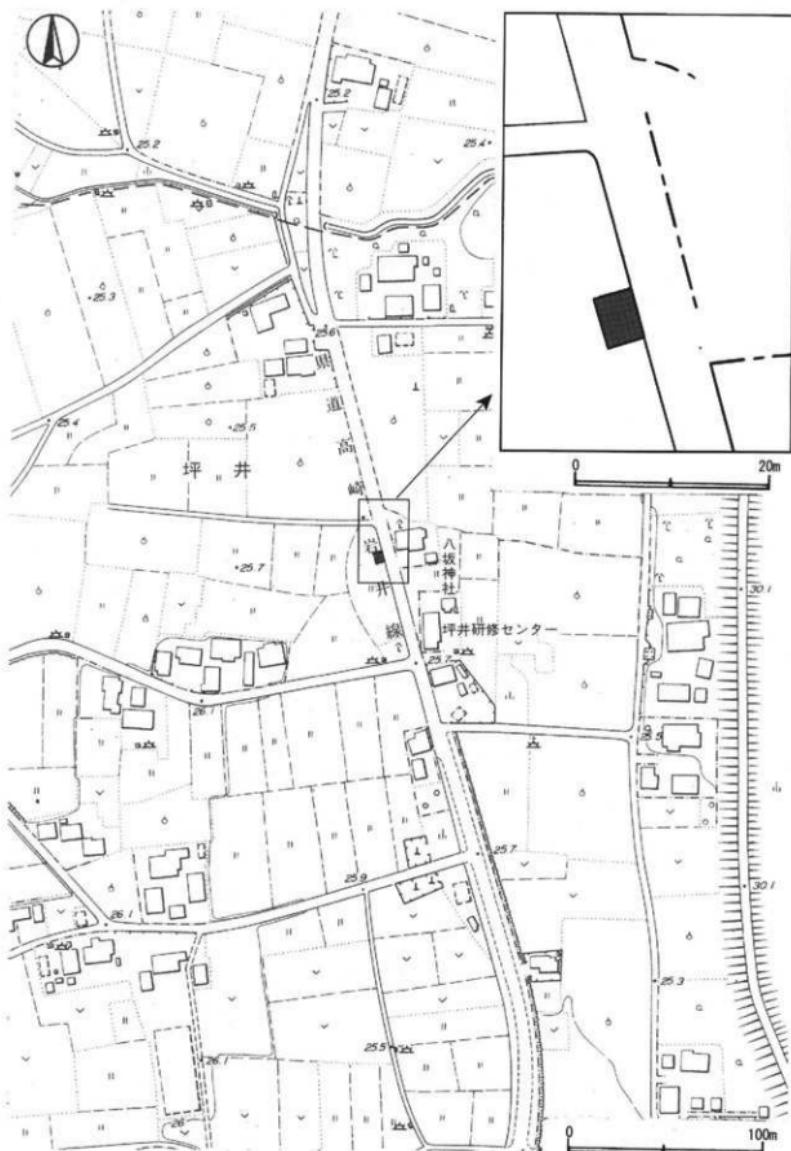
- 1) 結城市史編さん委員会『結城市史』第4巻古代中世遺史編 結城市 1980年
- 2) 「大渡戸から川尻までの鬼怒川の長さは3.75キロメートルで、1250丈」であり、『続日本紀』の記載と一致していることが指摘されている。八千代町史編さん委員会『八千代町史(通史編)』八千代町 1987年
- 3) 赤井博之「鬼怒・小貝川中流域における低地遺跡の基礎的研究」『茨城県史研究』第79号 茨城県立歴史館 1997年
- 4) 藤原均「「本木遺跡」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』第6集」八千代町教育委員会 1999年
- 5) 小川和博他「久保遺跡・古薬師遺跡・土宮後遺跡』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』10 八千代町教育委員会 2002年
- 6) 阿久津久他「尾崎前山—茨城県結城市八千代町尾崎前山一』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』2 八千代町教育委員会 1981年
- 7) 八千代町史編さん委員会『八千代町史(資料編I)』八千代町 1985年
- 8) 註6と同じ
- 9) 小川和博他「氏神A遺跡』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』7 八千代町教育委員会 1998年
- 10) 勝沼修平「茨城県南部における宮ノ台文化の問題』『茨城県史料考古資料編弥生時代』付録26 茨城県 1991年
- 11) 若崎卓也「太田古墳』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』4 八千代町教育委員会 1991年
- 12) 小川和博他「仁江戸7号墳』『八千代町埋蔵文化財調査報告書』9 八千代町教育委員会 2002年
- 13) 註7と同じ



第1図 内海道跡周辺遺跡位置図（■は旧河道）

表1 内海道遺跡周辺遺跡一覧表（第1図中の●は古墳、■は城館跡、▲は塚を示す）

番 号	遺 跡 名	時代					番 号	遺 跡 名	時代				
		古 石 器	新 石 器	古 墳	中 世	近 世			古 石 器	新 石 器	古 墳	中 世	近 世
1	内海道遺跡			○	○		23	美町遺跡			○	○	○
2	六方寺遺跡			○			24	高野台遺跡		○		○	○
3	宮西遺跡			○	○	○	25	青木田遺跡					○
4	大里北遺跡			○	○	○	26	東山遺跡			○	○	
5	小塔遺跡			○			27	沼垂前遺跡			○	○	
6	後山北遺跡			○	○	○	28	小次郎内遺跡			○	○	○
7	後山南遺跡			○	○	○	29	宮氣遺跡				○	
8	出羽内遺跡			○	○	○	30	沼森本田遺跡			○	○	
9	淡間神社遺跡					○	31	川尻北遺跡			○	○	○
10	流上池跡			○	○		32	小瀬後遺跡			○	○	○
11	久下田本田遺跡			○	○	○	33	小瀬前遺跡			○	○	○
12	川村遺跡			○			34	沼森野方遺跡			○	○	
13	野爪遺跡				○		35	栗崎遺跡			○	○	
14	塚前遺跡					○	36	鷲宮皆城跡				○	
15	財布施益神社周辺遺跡	○	○	○	○		37	鳥遺跡		○		○	○
16	八幡遺跡			○			38	北鳥遺跡		○		○	○
17	瀬戸井下遺跡			○	○	○	39	若香坂東遺跡		○	○	○	○
18	瀬戸井上遺跡			○	○	○	40	二郎宮遺跡		○		○	○
19	山之神古墳			○			41	西仲前遺跡			○	○	○
20	旧中筋小学校遺跡	○	○	○	○		42	若古墳			○		
21	椎原山遺跡	○	○				43	西祝曾遺跡	○	○	○	○	○
22	伊勢山遺跡	○		○			44	西浦遺跡			○	○	



第2図 内海道遺跡調査区位置図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

内海道遺跡は、奈良時代と平安時代の複合遺跡である。調査前の現況は畑地で、調査面積は26m<sup>2</sup>である。調査の結果、遺構は竪穴住居跡2軒（奈良時代1、平安時代1）、土坑1基を確認した。遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。出土した主な遺物は土師器、石（支脚）である。

### 第2節 基本層序

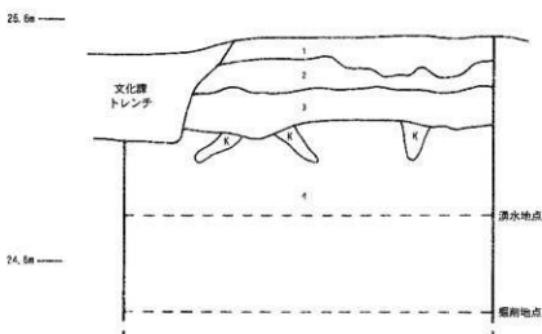
A1e5区にテストピットを設定した。約1.2m掘り下げるところ地下水が湧き出でてきたため、基本土層は地下水の上昇地点よりも上の観察に留まった。

第1層は黒褐色の表土層で、粘性・締まりは強い。粘質土に粒子の細かい砂粒が混じっている。層厚は18~32cmである。

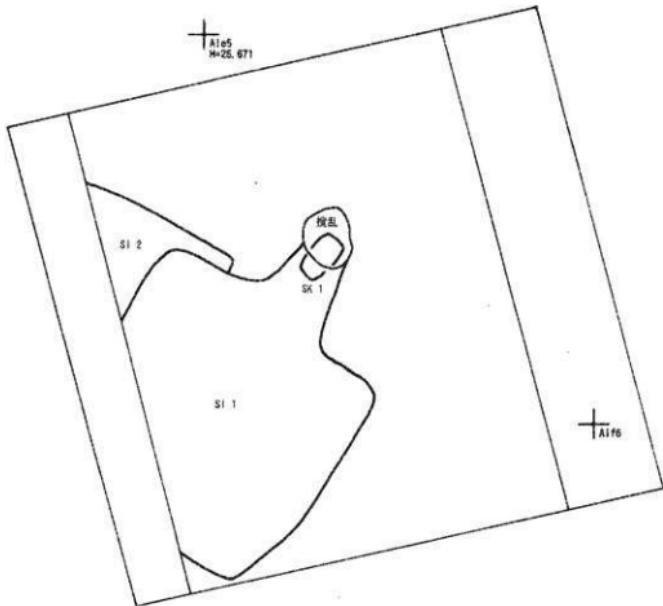
第2層は灰黄色の現代の陸田層で、粘性・締まりは強い。粘質土に粒子の細かい砂粒が混じっている。層厚は10~20cmである。

第3層は褐灰色の粘土を若干含む砂層である。砂の粒子は細かい。粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は14~20cmほどである。

第4層は暗灰黄色の砂層で、鉄分の中ブロックを多く含む。粘性は弱く、締まりは普通である。遺構は、本層上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 内海道遺跡遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、堅穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

##### 第1号住居跡（第5～7図）

位置 A1e 5区に位置し、微高地上的平坦部に立地している。

重複関係 第2号住居跡と第1号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約2.66m、短軸2.51mのはば方形である。北東壁が窓を挟んで段違いになっており、右側がやや突出している。主軸方向はN=38°-Eである。壁高は4~20cmで、各壁とも垂直に立ち上っている。

床 地山の砂層をそのまま床としている。P1の脇に、住居掘削時の掘り残しと考えられる地山の高まりがあるが、ほぼ平坦である。

電 北東壁の中央部に付設されている。煙道部の先端が壊乱により壊されている。袖部および天井部は残存しておらず、収納材の粘土も確認できない。焚口から煙道までの現存高は100cm、燃焼部幅50cm、壁外の掘り込みは60~90cmである。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、渋く赤変している。火床部左寄りに自然礫を立てて支脚としている。焚口部は浅くくぼんでいる。

ピット 1か所。P1は深さ25cmで、外傾している。窓と対面する位置にあるが、中央部に寄りすぎていることから出入り口施設に伴うピットとは考えにくく、性格不明である。

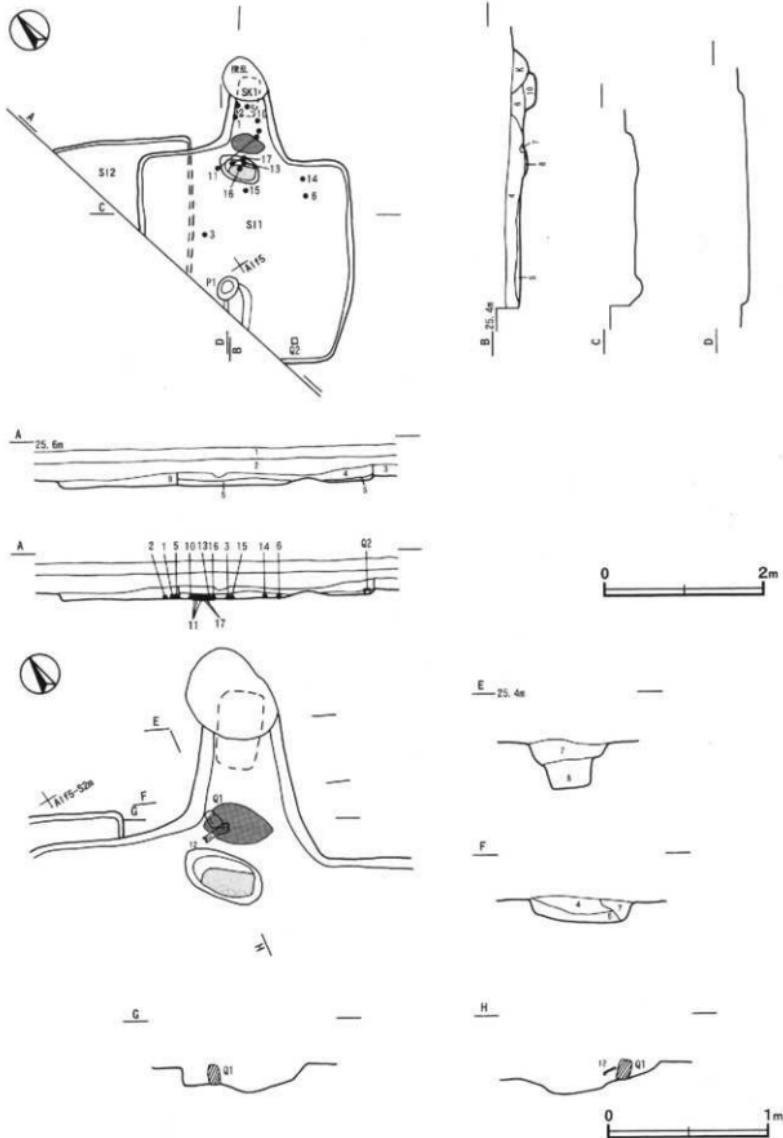
覆土 第4層～第8層が本跡の覆土である。境界から土砂が堆積している状況から、自然堆積と考えられる。

##### 土層解説

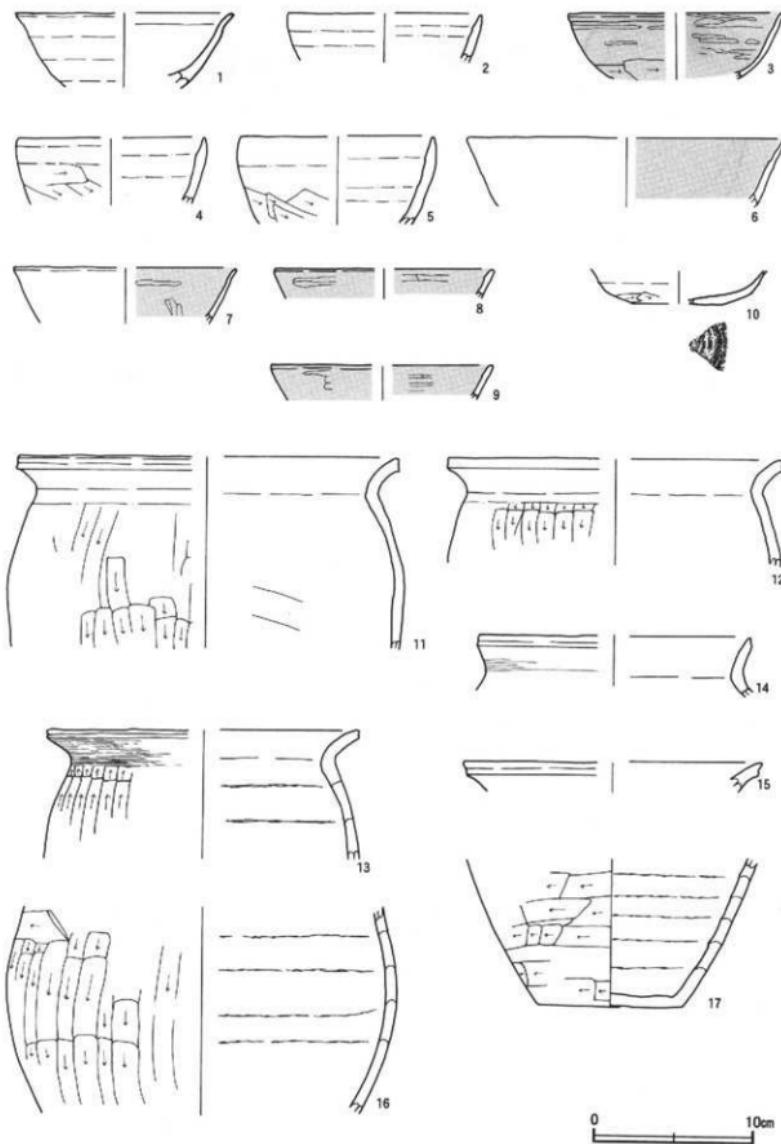
1 黒褐色	耕作土	6 黑灰色	焼上粒子・炭化粒子・鉄分のブロック微量
2 灰黄褐色	砂質かつ粘土質の窓植土（基本層序の3番と対応）	7 明褐色	焼上ブロック多量（SI-1覆土）
3 暗灰黄色	砂層 鉄分のブロック多量（基本層序の4層と対応）	8 黑褐色	炭化物・灰・焼上粒子多量（SI-1覆土）
4 黄灰色	燒土粒子・炭化粒子・鉄分のブロック・砂のブロック少量（SI-1覆土）	9 黃灰色	砂のブロック微量（SI-2覆土）
5 黄褐色	砂のブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・鉄分のブロック少量（SI-1覆土）	10 黄灰色	焼土ブロック、鉄分のブロック微量（SK-1覆土）

遺物出土状況 土師器片125点（碗34、杯4、甕87）、石製支脚1点、自然礫1点、鐵滓1点が出土している。これらは覆土下層および床面からの出上である。掲載した遺物はすべて破片で、床面からの出土であり、窓燃焼部および焚口部に集中している。出土状況から住居廃絶後すぐに廃棄されたものと考えられる。2・4・5は古い様相の土器であり、第2号住居跡から流れ込んだものと考えられる。Q2は煤が付着し、赤変している。

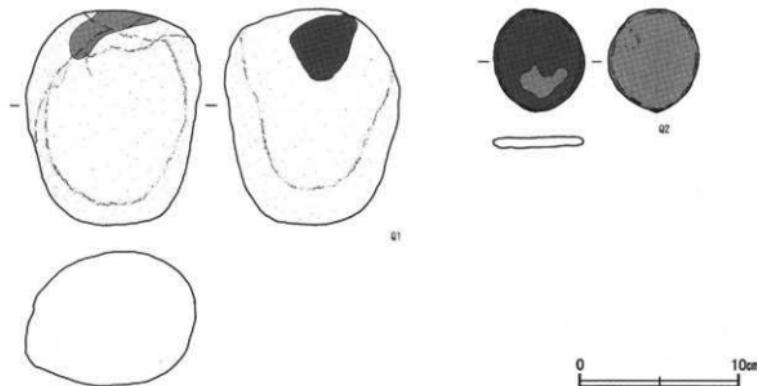
所見 時期は、出土土器とその出土状況および遺構の形態から10世紀前半と考えられる。



第5図 第1・2号住居跡実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表（第6・7図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 泽	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	楕	[13.4]	(4.7)	—	石英、赤・白色粒子、砂粒	橙	普通	ロクロナデ	甌	20% PL5
2	土師器	坏	[12.0]	(3.1)	—	石英、長石	にぶい 赤 黒	普通	口縁部ヨコナデ、体部内・外 面ヨコナデ	甌	10% PL5
3	土師器	楕	[13.4]	(4.2)	—	石英、長石、 砂粒	にぶい 青	普通	体部内・外面ヘラミガキ、体 部下端手持ちヘラケズリ	中央部 床 面	20% PL5 内・外面黒色処理
4	土師器	坏	[13.2]	(4.2)	—	石英、長石、 砂粒	明赤 黒	普通	口縁部ヨコナデ、体部内・外 面ヨコナデ、体部下端ヘラケズリ	覆土	20% PL5
5	土師器	坏	[12.0]	(5.5)	—	石英、長石、 砂粒	にぶい 赤 黒	普通	口縁部ヨコナデ、体部内・外 面ヨコナデ、体部下端ヘラケズリ	甌	20%
6	土師器	楕	[20.0]	(4.4)	—	石英、長石、 砂粒	にぶい 黄 黒	普通	ロクロナデ	北東壁 付近床面	5% 内面黒色処理
7	土師器	楕	[13.8]	(3.5)	—	赤色粒子、砂 粒、雲母	にぶい 青	普通	体部内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理
8	土師器	楕	[13.6]	(1.9)	—	赤色粒子、砂 粒、雲母	黒	普通	口縁部内・外面ヘラミガキ	覆土	5% 内・外面黒色処理
9	土師器	楕	[13.6]	(2.2)	—	長石、赤色粒 子、砂粒、雲母	黒	普通	口縁部内・外面ヘラミガキ	覆土	5% 内・外面黒色処理
10	土師器	坏	—	(2.1)	[5.8]	石英、長石、 砂粒	橙	普通	底部回転ヘラ切り、体部下端 手持ちヘラケズリ	甌	10%
11	土師器	甌	[23.4]	(12.0)	—	長石、砂粒、 雲母	橙	普通	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘ ラケズリ。体部内面横方向ヘ ラナデ	甌	25% PL5 外面被熱斑、煤 付着
12	土師器	甌	[20.0]	(6.6)	—	石英、長石、 砂粒	にぶい 青	普通	III縫部ヨコナデ、体部外面ヘ ラケズリ。体部内面横方向ヘ ラナデ	覆土	25% PL5
13	土師器	甌	[19.4]	(7.8)	—	長石、赤色粒 子、砂粒	橙	普通	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘ ラケズリ	甌	10% PL5 体部内面輪積痕
14	土師器	甌	[16.9]	(3.4)	—	長石、赤色粒 子、砂粒	橙	普通	口縁部ヨコナデ	北東壁 付近床面	5% 体部内面輪積痕
15	土師器	甌	[18.6]	(1.9)	—	石英、赤・白 色粒子、砂粒	にぶい 青	普通	口縁部ヨコナデ	甌前面 床 面	20% 体部内面輪積痕

番号	種別	器種	II 径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	土器	束	—	(13.0)	—	長石、赤色粒 了、砂粒	褐	良好	体部外向ヘラケズリ	遠	20% 外部内面輪積痕
17	土器	束	—	(9.3)	9.2	石英、長石、 砂粒	褐	普通	体部外向ヘラケズリ	近	20% 内部内面輪積痕

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	支撑	13.3	10.8	8.3	1470	安山岩	部分的に赤色、煤付着	遠	PL5
Q 2	自然瘤	6.3	5.6	0.8	30	砂岩	全面に煤付着、一部赤色	南側斜面	

## 第2号住居跡（第5図）

位置 A1e4区に位置し、微高地上の平坦部に立地している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東壁の一部が確認されただけであり、規模は不明である。平面形は方形または長方形と推定される。

床 地山の砂層をそのまま床としており、ほぼ平坦である。

竈 確認されていない。

ピット 確認されていない。

覆土 第9層が本跡の覆土である。壁際から上砂が堆積している状況から、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器細片3点が覆土中から出土している。

所見 本跡から出土した遺物は、いずれも細片で図示できるものではなく時期は特定できないが、遺構の重複関係から10世紀以前と考えられる。第1号住居跡出土の2・4・5は、本跡から流れ込んだ可能性を考えられ、8世紀代の時期が推測される。

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査で時期不明および性格不明の土坑1基を確認し、また表面採集、試掘、表土除去、遺構確認の段階での遺構に伴わない遺物がある。以下、それらの遺構と遺物について記述する。

### (1) 土坑

#### 第1号土坑（第8図）

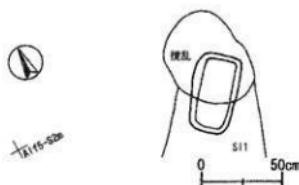
位置 A1e5区に位置し、微高地上の平坦部に立地している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸0.48m、短軸0.23mの長方形で、主軸方向はN  
-35°-Eである。底面は平坦で、深さは15cm、壁は垂直に立ち  
上がっている。

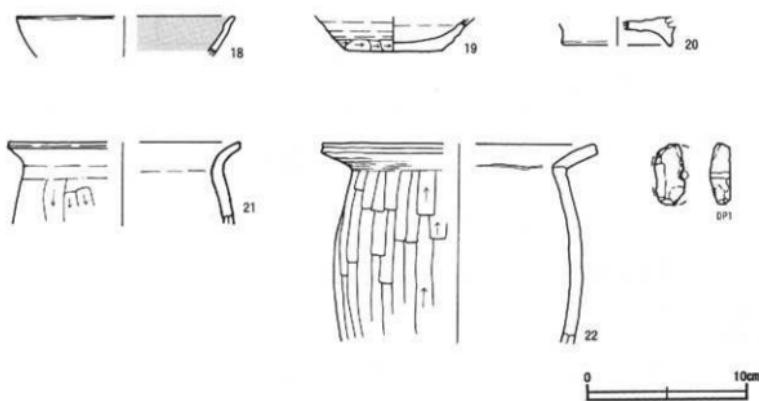
覆土 単一層である。堆積状況は不明である。

時期 本跡の時期は、遺物が出ていないため特定できないが遺構  
の重複関係から10世紀以前と考えられる。



第8図 第1号土坑実測図

(2) 遺構外出土遺物 (第9図)



第9図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	瓶	[13.6]	(2.5)	—	白色粒子, 砂粒, 塗母	灰褐色	普通	口縁部内面ハラミガキ	表土中	5% 内面黒色処理
19	土師器	壺	—	(2.2)	6.0	長石, 赤・白色粒子, 砂粒	に赤い秀	普通	底部回転ヘラ切り後一定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ	表土中	20%
20	土師器	瓶	—	(1.8)	[7.0]	赤・白色粒子, 砂粒	に赤い秀	普通	回転ヘラ切り後高台貼り付け	表土中	20%
21	土師器	甕	[14.4]	(5.1)	—	石英, 長石, 砂粒	に赤い秀	普通	口縁部ヨコナデ, 体部外側ヘラケズリ	表土中	5% PL5
22	土師器	甕	[17.1]	(12.4)	—	石英, 赤・白色粒子, 砂粒	橙	普通	口縁部ヨコナデ, 体部外側ヘラケズリ, 体部内面横方向ナダ	文化譜式 側Eトレ ンチ	20% 体部内面に輪削痕 PL5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DPI	紡錘車	(3.8)	(2.2)	1.3	8	粘土	表面の剥落が激しい	表面探査	40%

表2 住居一覧表

住居 番号	位置 (表地)	主軸方向 平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁 (cm)	床面 壁脚 壁脚 柱穴 柱穴 ビット	内 部 施 設			覆土 土 量	土 坑 遺 物	時 代	備 考 新旧関係 (古→新)
						玄関口	ロッジ	窓				
1	A1e5	N-38°-E (方形)	(2.66)×2.51	4~20	平頭	—	—	—	1	自然	土師器, 石製支撑	10世紀
2	A1e4	— (方形)	—	10~15	平頭	—	—	—	—	自然	土師器	8世紀前半

表3 土坑一覧表

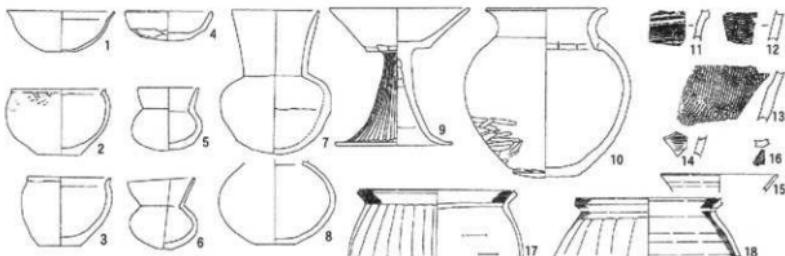
土坑 番号	位 置	長 軸 方 向	平 面 形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 遺構番号・新旧関係(古→新)
				長 軸 (m)	短 軸 (m)	深 さ (m)					
1	A1e5	N-35-E	長方形	0.48	0.23	15	垂直	平頭	—	—	本跡-SI-1

#### 第4節 まとめ

今回の調査は内海道遺跡全体の一部分にすぎず、遺跡がさらに広がっていることは、八千代町教育委員会の分布調査の結果からも明らかである。

今回の調査では、8世紀代と推定される堅穴住居跡1軒と10世紀前半の堅穴住居跡1軒が確認された。当遺跡周辺では微高地及び低地遺跡の調査事例はないが、表面採集遺物から流域遺跡の総合的な検討がおこなわれている<sup>1)</sup>。赤井博之氏は遺跡の立地や時期の検討から、当地域を「毛野川流域」と呼称し、遺跡の初源期を古墳時代前期に求めている。この地域の遺跡分布は濃く、いずれの遺跡もおむね奈良・平安時代である。微高地及び低地遺跡の調査事例としては千代川村味川遺跡があり<sup>2)</sup>、掘立柱建物跡、溝状遺構、ピット状遺構、井戸跡、土坑墓、溜井状遺構が確認され、治水・利水関連の遺跡とされている。8世紀中葉の掘立柱建物跡はこの遺跡の低地開発の初期段階に位置づけられ、中世以降も断続的ではあるが同じ場所で水田経営がされたものと考えられている。

内海道遺跡を含む八千代町の低地遺跡も耕地の開発とは無関係ではないと推測される。いずれにせよ周辺の低地遺跡を含めた今後の調査研究に期待したい(図10-1～10は沼森遺跡、11～13は小屋遺跡、14は在家遺跡、15～18は宮崎遺跡の表面採集遺物あり、註1文献より転載した)。

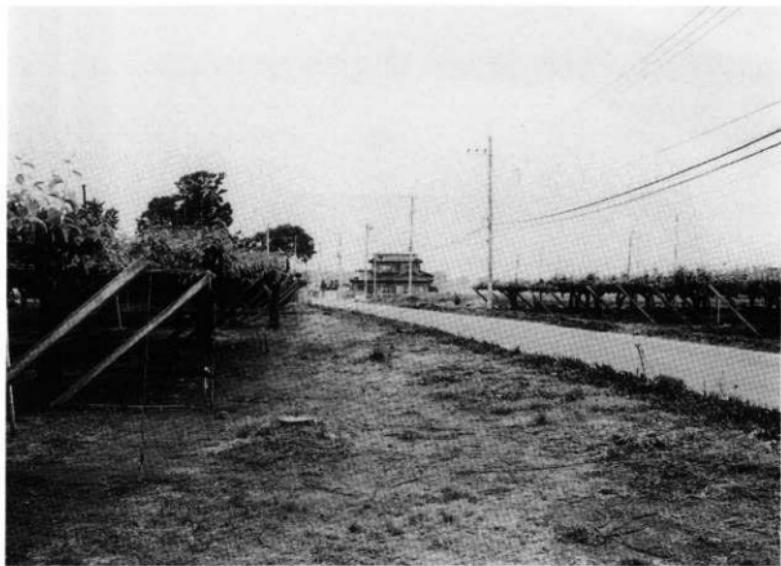


第10図 内海道遺跡周辺遺跡採集遺物

#### 註

- 1) 赤井博之 「鬼怒・小貝川中流域における低地遺跡の基礎的研究」『茨城県史研究』第79号 茨城県立歴史館 1997年
- 2) 小川和博他 「味川遺跡」『千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 千代川村教育委員会 2001年

写 真 図 版



遺跡遠景（北東側より）



基本層序

PL2



第1号住居跡 完掘状況（北東側より）



第1号住居跡 遺物出土状況（南西側より）



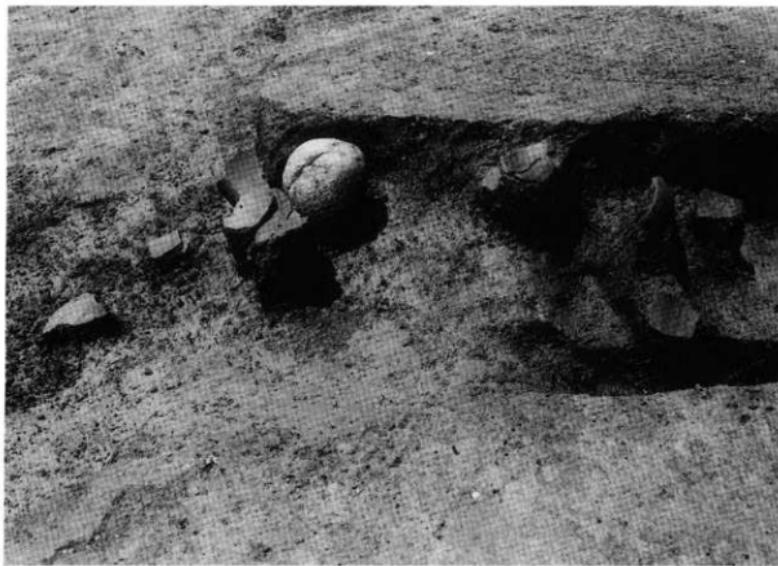
第1号住居跡 遺物出土状況（北東側より）



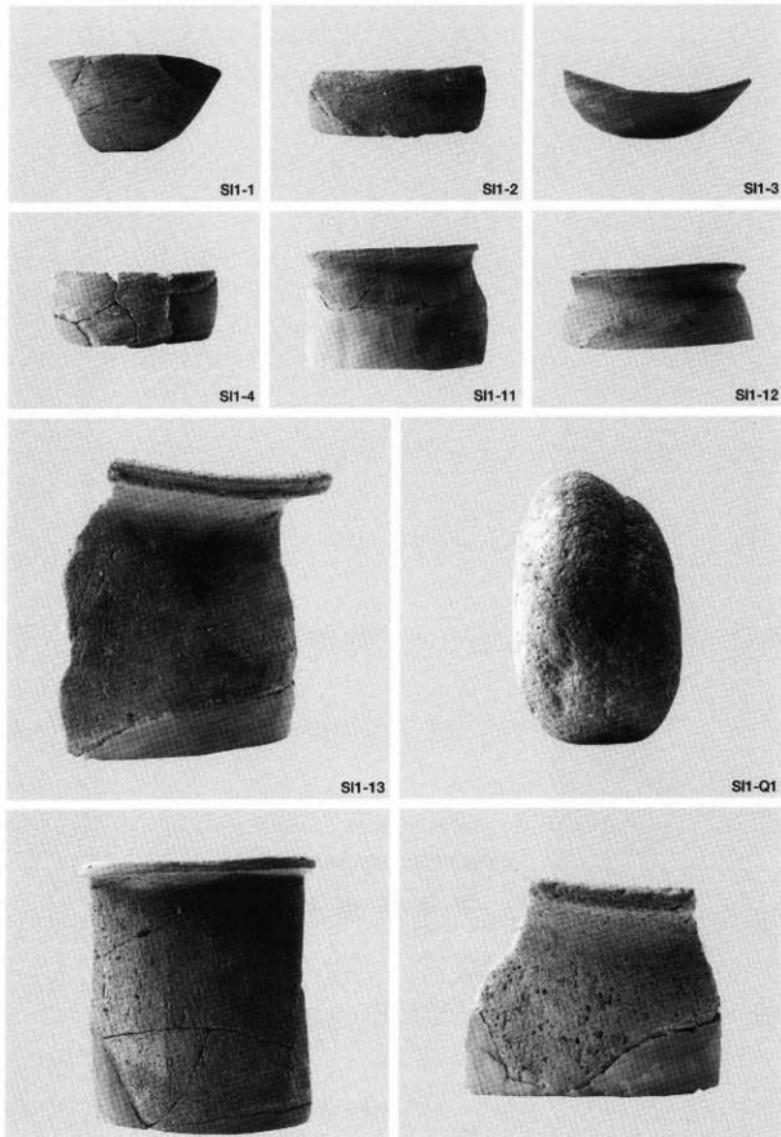
第1号住居跡 遺物出土状況（南西側より）



第1号住居跡 電遺物出土状況（南西側より）



第1号住居跡 電遺物出土状況（南東側より）



文化試掘 E トレンチ-22

第1号住居跡、文化試掘 E トレンチ、遺構外出土遺物

遺構外-21

茨城県教育財団文化財調査報告第232集

内海道遺跡

平成16（2004）年3月24日 印刷  
平成16（2004）年3月26日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社  
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3  
TEL 029-282-0370